

エスニシティという概念の批判的検討

経験のない「民族」を考察するために

筑波大学大学院 人文社会科学研究科 井上恵子

本報告では、エスニシティという概念の批判的検討を行う。現在、日本社会では在日外国人3世などの日本生まれ日本育ちの外国につながりを持つ人々が多く生きている。彼・彼女らは日本国籍を含む多様な国籍をもちながら、両親の教育や周囲との関係の中で自らのエスニシティを意識したりしなかったりする。また、日本に生まれ日本国籍を持つ「日本人」も海外に出る機会の増加や、マスメディアなどで触れる情報などを通して自らのエスニシティを意識することもあるだろう。このような社会の状況を考えると、現在の日本においてエスニシティとは生まれた時から備わっている本質的なものではなく、本質的なもののように感じられると同時に状況に応じて「育まれていく」ものであるということが出来る。エスニシティとは人種や国籍、ルーツを持つ国家と居住している国家の政治的な関係性など様々な要因によってその表現のされ方や、自らのアイデンティティの一部としての感じ方が変化するものでもある。

一方、エスニシティの和訳として用いられる民族という言葉は一般的に文化や起源、歴史的変遷などを共有したある同族集団のことを意味する。学術的な議論の時にはこのような素朴な定義にもとづいて民族という言葉が使われることは少ない。しかし日常生活の中で民族という言葉は一般的な意味で用いられることが大多数である。つまり民族という言葉は個人や集団をその人の経験ではなく、ある集合的な何かとして外側から定義づける概念であるといえる。本報告では上述の意において「民族」という表記をする。

このような意味で「民族」という言葉が用いられた場合、自分自身が経験したことの無い空白のカテゴリが自分が自分であることの一部をなすという矛盾を含んだリアリティがたち現れる。本報告ではこのような状況における空白のカテゴリのことを「経験のない『民族』」とし、この状況を分析するための分析視角としてエスニシティという概念を検討する。

本報告では、まず「民族」およびエスニシティの二つの概念について検討することによりこれらの概念の差異を明らかにする。次に、シカゴ学派のエスニシティの概念やカルチュラルスタディーズにおけるエスニシティの概念を整理し批判的に検討する。最後に日常生活の中で直面する経験のない「民族」の具体例を挙げながらエスニシティという概念の有効性について検討を行う。